

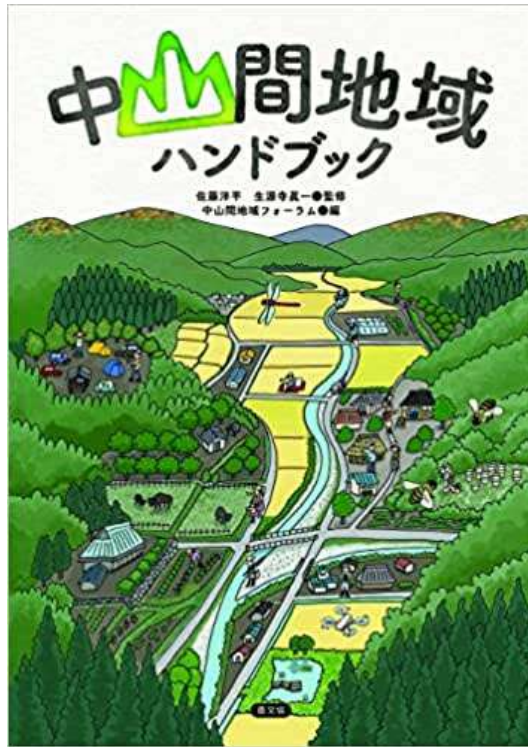


パネルディスカッション

新しい中山間地域とは

ゼロカーボン・DXの可能性とは？
地域の「何」が変わるのか？

ゼロカーボンとDXに共通の視点①



佐藤 洋平・生源寺 眞一 監修,
中山間地域フォーラム編(2022)
「中山間地域ハンドブック」農文協

「脱炭素と農業」 「新技術の活用」

• 「転換点」にある

ゼロカーボン

世界的には2015年以降、日本においても2020年にはすでに脱炭素への取組は「制約」ではなく「新たな成長」とする発想の転換

DX（≠デジタル化）

Society5.0・Industry4.0・Agriculture4.0など、データとデジタル技術による産業・社会の変革期

• 現在の「単純な延長」に目指すべき未来はない

フォアキャストからバックキャストへの発想の転換への注目

ゼロカーボンとDXの共通の視点②

- 「手段」であって「目的」ではない

持続可能な経済社会の実現や人類のWell-beingの向上のための手段

※産業革命以前に比べて世界の平均気温上昇を2°Cより十分分低く保つ（1.5°Cに抑える努力を追求する）ことは人類の必須の課題

- 地域や組織の「存在意義」＝「目的」を起点に適切な手段を選ぶ

目的を共有→納得・共感→自分ごと→共創→手段を活かせる
＝起点は「目的」であって「手段」ではない

多くの内発的な地域づくりの営みは、このようなプロセスをすでに経てきたのでは？

- 「課題解決」を通じて新たな価値を生み出す

課題解決のための投資が生み出す価値とその帰結が重要

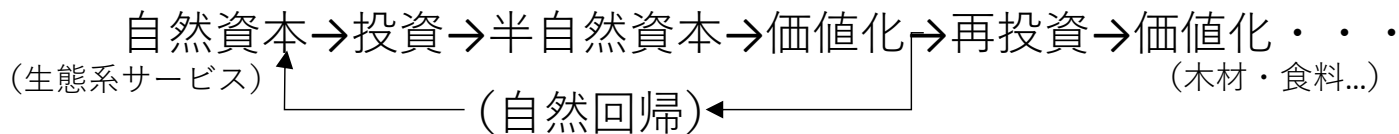
ゼロカーボンと中山間地域

- エネルギートランジションは要

国家レベルでのエネルギートランジションのビジョン（再エネ／次世代エネルギー）と技術革新を見据えつつ、地域からは地域の資源賦存やサプライチェーンの特徴、災害時のBCPなどを見据えて、取り組めることから取り組む必要

- より俯瞰的にはあらゆる無駄をなくすサーキュラーエコノミー

- 中山間地域の特徴＝圧倒的なボリュームの自然資本



常に変化する社会経済の中で、自然資本の「価値化」「再投資」「自然回帰」といったコミットメントが継続するための知恵や仕組みが必要

炭素吸収/貯留・再生可能エネルギーなど価値化のポテンシャルが加わる

(価値化の仕組み：J-クレジット、売電、製品差別化)

-新たな「投資」の機会／地域経済の循環のバランスを再考する機会

-自然資本の持続的な利用の知恵や技をもつ人的資本や社会関係資本も魅力

-持続的なライフスタイルに価値をおく人にとっての魅力の1つ

DXと中山間地域

- 単にモノを消費する「消費者」から、消費を通じて自分の考えや価値観に
あう生活をする「生活者」を起点とした変革

(「XaaS」 / D2C / マス・カスタマイゼーション / シェアリング...)

「制約」から解放され、個々の生活者が多様な価値を追求できる可能性

=中山間地域での生活や都市との共生にも大きな影響の可能性

- みなと同じシステムを利用する必要性 = 「生活者」との共創が必要
小さな成功体験を積み上げ(PoC)、価値を感じる → 新たな参加型の可能性
- 特定地域へのコミットメントの継続性が保証されるわけではない(?)

くらし (財・サービス)

流動性：サブスクリプション・シェアリングにより利用した
いときに利用したいモノ・サービスの利用が可能

多様性：生活者の志向に合わせた多様な財・サービスの提供

分散性：場所に制約されない財・サービスへアクセス機会
一極集中によるリスクの分散

つながり

流動性：ライフスタイルにおける場所の制約の低下

多様性：つながり方や程度の多様化

(例：関係人口)

分散性：つながるときの「同期」「非同期」を選択可

しごと

流動性：柔軟な人材マッチング

多様性：多様な専門家の協働、専門から他業まで多様な
仕事の組み合わせ、専門知識や体力等の
制約の緩和による多様な人材の活躍...

分散性：誰と) 時間・場所の同期・非同期を選択可
誰に) 近隣⇔遠方に広がる生活者 (顧客)

ディスカッションの論点

1. DXの可能性とは？
2. ゼロカーボンの可能性とは？
3. これらが地域の「何」を変えるのか？